



ジョージ・ブラウン George Brown (1835-1917)

1999年に民博で開催された企画展「南太平洋の文化遺産」



ニューアイランド島のマランガン仮面



マランガンや神像のコレクション



ウッドラーク島の島人とジョージ・ブラウン

ジョージ・ブラウン・コレクション その価値が輝くとき

石森 秀三

(いしもり しゅうぞう)

北海道大学観光学高等研究センター長
国立民族学博物館名誉教授



売り出された 南太平洋の文化遺産

わたしは一九七五年に民博助手に採用され、その年に早くも資料収集のために南太平洋に派遣された。その際にミクロネシアのマージナル諸島で収集をおこなったが、小船に乗って離島を目指していたときに嵐に遭遇し、危うく命をおとしかけた経験がある。

一〇年後の一九八五年に英国で南太平洋資料の収集をおこなうという得難い経験をした。南太平洋地域の民族資料について、民博は大きな問題を抱えていた。それはメラネシア地域の民族資料が極端に少ないことであった。そのような悩みを抱えるなかで、一九八五年に突然、得難い話が舞い込んできた。それは英国からの話で、ニューキャッスル大学が所蔵するジョージ・ブラウン・コレクション(以下GBCと略す)約三〇〇〇点が売りに出されているというものだった。

ジョージ・ブラウンは、一八三五年に英国で生まれた宣教師で、一八六〇年から南太平洋の各地で布教活動をおこなうとともに、仮面や各種の生活用具など、多様な民族資料の収集をおこなった。とくに、メラネシア地域のニューブリテン島とニューアイランド島で収集された約七〇〇点の資料は、ヨーロッパ人による民族資料

収集としてはもっとも早い時期のものだ。

英国へ学術価値の調査

GBCを購入できれば、民博の南太平洋民族資料の空白部分を埋めることができるが、大きな問題があった。その価格が約二億円もしたことだ。当時の民博の標本資料収集委員会の判断は、学術資料として購入に値する貴重なコレクションであれば、購入してもよいというものだった。そこで、わたしが英国に派遣され、学術的価値を評価することになった。

英国ではニューキャッスル大学の学長に会い、交渉をおこなった。学長はGBCを分散させたくないの一括購入してほしいと述べられ、資料チェックを快諾してくれた。早速、このコレクションを管理している大学附属博物館長に電話して、協力するように指示していただいた。

昼食後に博物館を訪れたところ、秘書だけしかおらず、「館長は不在なので、勝手に見てください」と言われ、収蔵庫の鍵の束を手渡された。収蔵庫の前で扉を開けようとして鍵を差し込んだが、いずれの鍵でも開かない。秘書のところに再度行き、「扉が開かない」と告げたが、「その鍵の束しかない」と言う。すぐに館長に連絡してほしいと頼んだが、連絡がつかないらしい。結局、ふたたび学長に会って、博物館の対応の悪

さを抗議したところ、明朝にはかならず対応させると確約してくれた。翌日、ようやく館長に会い、GBCのチェックを周到におこなうことができた。

当時の英国ではサッチャー首相による行財政改革が強力に推進され、大学に対する政府の財政支援が大幅に削減されていた。ニューキャッスル大学でも学長を中心に改革が進められており、その際に注目されたのがGBCであった。学長がサザビーズ社にその価値評価を依頼したところ、約二億四〇〇〇万円という結果になった。収蔵されているだけで、なんらの活用もなされていないために「宝の持ち腐れ」と判断されたいらしい。大学理事会での売却が正式に決定され、サザビーズ社に売却の仲介が任せられた。

世界中で展示してこそ 高まる価値

売却の決定を知った大英博物館のオセアニア地域部門の専門家が国内の研究者に呼びかけて、売却反対運動を展開した。大学附属博物館長も反対派の主要メンバーの一人であった。そのために、嫌がらせをされたわけだ。当時、日本企業が英国にかなり進出しており、経済的侵略だと批判されていた。そのうえに、英国の貴重な文化遺産の購入をもうくるものは文化的侵

略だという新聞記事まで登場した。GBCをめぐる、かなりヒステリックな状況が生じていた。換言するならば、それだけ価値の高い文化遺産と評価されていたわけだ。

結論的にいうと、さまざまな経緯の後、一九八六年に民博が購入した。英国での反対運動などで手間取っているうちに、ポンド下落と円高によって、最終的な購入価格は約一億四〇〇〇万円になり、民博は約六〇〇〇万円ほど得をした。

民博は一九九九年に「南太平洋の文化遺産」と題する企画展を開催し、GBCの展示をおこなった。わたしは企画展の実行委員会委員長を務めた。その開会式典の際に、バプアニューギニア国立博物館長とフィジー国立博物館長をお招きした。このコレクションには、両国の貴重な文化遺産が数多く含まれているので、両館長に「貴国に資料を返還した方がよいですか?」と尋ねた。すると、二人とも即座に「その必要はない。一括して民博で所蔵されるべきだ」とおっしゃった。

民博所蔵のコレクションとして、各国の研究者に注目されており、他の博物館への貸し出しの機会も増えている。おおいに共同利用していただくことは民博の使命に合致するし、GBCにとっても幸せである。